

ペン俳句会 句会報(第三六六号)

令和七年二月六日(木)

兼題『節分』、席題『立』

句会を、昨年十二月と同じ場所で開催。出席九名。投句十名。(欠席は金魚姫さん)

新田 ゆふき

冬空や朗々と立つ焼却塔

春立つも雪降らず空居座りぬ

寒暁や軋むレールとハイヒール

山茶花や素知らぬ白に隠す艶

節分の鬼一匹の夕餉かな

かじけ猫瞑り瞑らぬ眼かな

大津 そうかい

バスを待つ吾が影長し春近し

節分や背中に受くる日の力

吾が帰宅待つ人なき日寒昂

蠟梅の一樹町内灯したり

脚立出し弔問用の梅一枝

校庭に燦めく命春立てり

松田 一文字

天を掃く逆さ箒や枯櫂

夕影や床につぼみの寒椿

遠山の影絵めく富士冬夕焼

春立つや椅子の下にも昨夜(きそ)の豆

節分やおもちゃ屋に買ふ鬼の面

七いろに光る水煙春隣

中村 晃也

凍滝や神の居眠る気配満つ

春近し薫ぶき屋根に立つ煙

節分の夜や胃力メヲを終えしあと

冬菜摘む逆さに立てるマヨネーズ

雪原や墨絵仕立ての雲の影

福豆とセットで買ひぬ鬼の面

浜口 金魚姫

鬼も内と鬼を従へ節分会(吉野山金峰山寺鬼の祭典行事)

表札を新しくして春立つ日

一途さを啼きて伝える猫の恋

薄氷の下は底なしかもしれず

薄氷の下に目論見めだか鉢

鋭角に薄氷割れて沈みけり

志村 良知

町は朝垣は山茶花今盛り

盛り花の千両の実を鉢に埋む

それぞれの春待つ姿枯木立

天空に細き残月睦月行き

土手道や蓬の芽吹きそつと避く

久々の雨万物に節分会

宮原 凧

節分や鬼の役終へ今日了

手の平の春色こぼれ金平糖

あれこれのツマミ持ち寄り女正月

冬枯れや彩なき風の中に佇ち

荒星や老木の影立ち尽くす

山茶花のとめどなく散り今朝の風

長尾 進一郎

春の陽に川のきらめき下校の子

水温む跳ねし魚の腹光り

日脚伸ぶご飯ですよと母の声

カメラ手に歩きたくなる春日かな

書初めの揺れる廊下や始業ベル

枝枝に新芽顔出し夜辺の雨

安藤 晃二

ミュンヘンや霧氷灯に映えパブの更け

風花を幼子(おさなご)口に捉へけり

碧空や冬枯れの道アクセル踏む

新宿や街路樹に人冬作業

節分や男声荒く福は内

春立つや築波嶺遥か土香る

西川 知世

暖炉燃ゆをんなの被るコック帽

凍つる夜の星のひとつがとつと迸る

寒雀我に降りきて鳴かざりき
野球帽つばを後ろに夕焚火
茶の花の垣根に止めて三輪車
凧と斜めに渡る交差点

今回は令和七年三月六日（木）。兼題は季語「蒲公英（たんぽぽ）」（新田ゆふきさん出題）、席題は西川知世さん出題の「心」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

三月の兼題「蒲公英」

蒲公英（たんぽぽ） 傍題はふじな・たな・白花
たんぽぽ・蒲公英の絮・鼓草（つづみぐさ）。不思議に万葉以下、古代、中世の短歌には詠まれていなくて、近世の天明以降の俳諧にふじな、たなと詠まれているのが蒲公英だという。現代の俳句では、もつとも身辺にみられる花として、春の代表の一角を担う句材になっている。花が終わって実になると白い冠毛が風に乗ってどこまでも舞い飛んでいく。ちょうど幼児の目線のあたりを飛び格好の句材、花を摘んだり、綿を吹いたりして子供が飽かずに遊ぶ花である。最近は花粉症とかの問題もあるそう…。

鼓草は、形が鼓面に似ているところからきている。鼓の音を真似て子供がタンポポとかテテポポとか言いながら遊び出して今日の通名となったと

歳時記で知った。ポと弾ける音はいかにも春を喜ぶ気持ちと重なって春の先駆けの花である。黄の頭上花は太陽の輝きを彷彿とさせる。西日本では白っぽいクリーム色の花も多いそう。根や葉を食用にする食用たんぽぽもあるらしい。

たんぽぽや野をめぐりくる水の隈	大江丸
たんぽぽに飛びくらしたる小川かな	一茶
人々は皆芝に腰たんぽぽ黄	高浜虚子
たんぽぽのサラダの話野の話	高野素十
蒲公英や日はいつまでも大空に	中村汀女
たんぽぽと小声で言ひてみて一人	星野立子
タンポポや一天玉の如くなり	松本たかし
たんぽぽの上に強風村黄なり	飯田龍太
蒲公英や鮫あげられて横たはる	水原秋櫻子
たんぽぽや長江濁るとこしなへ	山口青邨
蒲公英や石垣匂ふ海のふち	沢木欣一
蒲公英のとびとびに野の夕日まで	橋本榮治
たんぽぽの絮吹くにもう息足りぬ	飯島晴子
たんぽぽ絮空にゴスペルソング澄み	渋谷 道